

序

よく日本人は農耕民族であって、欧米人は狩猟民族であると言われる。そのような気質は、日本の研究者の根底にもあるようである。まず自分の専門という安住の地を求め、まわりに垣根を張りめぐらしてその中に閉じこもってしまう。よそさまの土地で何が起ころうとわれ関せず、自分の土地が侵害されない限りよそさまの土地を侵したりはしない。

全力をあげて努力することを、日本語で「一生懸命」と言う。これはもともと「一所懸命」からきた言葉である。すなわち、一つの領土を命を懸けて守るという意味だったのである。それが長い間、日本人の美徳とされてきた。まさに農耕民族である。

その背景には、日本の国土が四面海に囲われ、外敵から容易に侵略されない。おまけに気候が温暖で雨が多く、農作物の成育に適している。さらに日本近海は暖流と寒流が交わり、豊富な漁業資源にも恵まれている。そのため他人の領土を侵略しなくても、また新天地を求めなくても生きていくことができた環境にあったからと思われる。

しかし、近代になって人口が急増し、生活水準も向上し、自分の土地だけでは自給自足の生活を維持することができなくなってきた。新たな資源を求めて他人の土地を侵したり、新天地を求めて外に出ていかざるをえなくなってきた。そのような動きは、最近の産業界にも顕著に見ることができ。今までは日本の産業界はそれぞれが作り出す商品別に市場をすみ分けし、共存共栄の秩序を維持してきた。しかし市場が行詰るにつれて、新たな収益源を求めて多角経営に乗り出してきた。その中には、従来の建設業固有の領域にまで手を伸ばしてきた産業界も少なくない。日本の産業界も長い間の農耕型秩序から、新たな市場を求めて狩猟型へと転換しつつある。今までは全くの異業種と考えられてきた他産業も、時には市場において競合関係に立つことも増えてきた。その結果、日本の建設業界も長年の慣習によって守られてきた固有の領土に、あぐらをかいているわけにはいなくなってきた。他産業の動向をも射程距離に置きながら、時には技術で競争し、時には互いの長所短所を生かした新たな協調関係を創り出す時代に入ったと言えよう。建設業界における研究も、建設技術の固有の領域をさらに深めることは当然であるが、同時に他産業との境界領域にまで手を伸ばし、さらに一步踏み出すことが求められる時代に入ったと認識すべきであろう。

1998年4月

清水建設(株)技術研究所長

工学博士 山原 浩